講書始の儀

家　　正　則
〈国立天文台　〒181–8588 東京都三鷹市大沢 2–21–1〉
e-mail: masanori.iye2@gmail.com

講書始の儀（こうしょはじめのぎ）は明治天皇が年初に漢書と和書についての講義を専門家から聴く儀式として1869年（明治2年）に始まったそうです．1953年（昭和28年）からご進講者は人文科学，社会科学，自然科学からそれぞれ1名という形になり，同年には萩原雄祐東京天文台長が「最近の宇宙進化説」をご進講になりました．辞表を胸に岡山188 cm望遠鏡の建設構想とその意義をお話しになったと聴いております．建設に複数年度を要する188 cm望遠鏡はそれまでの3年上限を更新した5年国庫債務負担行為の最初の適用例として1958年から建設されました．1980年代，90年代には自然科学が2件の年も多かったようですが，近年は元の構成に戻っています．その後，天文学界からは，林忠四郎「太陽系の起源」（1993年），小田稔「科学者に残された宇宙の謎と課題」（1998年），佐藤勝彦「宇宙はどのように始まったのか？―現代物理学が描く創世記―」（2016年）の先生がたがご進講されておられます．この度，令和8年1月9日の講書始の儀でご進講をさせて戴く望外の機会がありましたので，その一部始終をご報告させて頂きます．

私の場合，ことの始まりは2年前のことでした．秋晴れのその日，私は「遅走性徘徊症候群」[*1]を発症し，始発電車とバスを乗り継いで中禅寺湖に行き，竜頭の滝を出発点に中禅寺湖畔からいろは坂を駆け下るジョギングをしていました．14時過ぎに東武日光駅に着き，帰りの電車を待っているときに携帯が鳴りました．文部科学省からで，2026年の講書始の儀の進講候補者として宮内庁に推薦したいというお話でした．私ごときにと大変驚きましたが，二度とない話なので謹んでお受けすることにしました．説明では，本番は再来年となるが来年の講書始の儀にも進講者控として参内せよとのこと．進講者が体調不良になった場合の交代要員という位置づけですが，行儀見習いの意味もあったのだと思います．ついては，ご進講内容の梗概案を至急起草するようにとのことでした．

公表までは内々にと釘を刺されたので，だれにも相談できませんでしたが，「観測天文学最前線と日本の活躍」と題して天文学界の様子をお伝えする内容での講話を起草することにしました．内容は，（1）ハッブルが人類の認識を銀河系の外まで広げ，宇宙膨張を発見してから約100年の間に発展した現代宇宙観を振り返り，（2）ハワイのすばる望遠鏡の建設を機に，銀河宇宙や系外惑星の観測的研究で日本が活躍していることをお話しし，（3）次世代の大型望遠鏡では，生命存在の兆候を示す系外惑星の発見や宇宙の加速膨張の実証観測などが期待されていることを述べることにしました[*2]．さらに，講話の最後には，（4）天文学研究が人類の宇宙観・文明観に与える視点に触れたいと考え，138億年の宇宙史，46億年の地球史，1万年の人類文明史，そしてこの100年の人新世史を振り返り，戦争や環境破壊のリスクを

*1 一部の高齢男性に散見される症状．雨天の日には発症しないことが知られているビョーキ
*2 萩原先生と違って退職者なので，辞表の用意は考えませんでした．

乗り越え安定に持続できる成熟した文明を築くことを我々皆が心することが大切だとする認識を，僭越ながら述べることにしました*3.

ご進講内容はこうして早めに固めましたが，実際の儀式の進行状況を知らなかったので，YouTubeで近年の実施例をみてみました．ここで驚いたのは，天皇皇后両陛下こそご進講梗概がお手元にありますが，ほかの皇族方や陪聴者には配布資料は一切なく，厳かな雰囲気の中，ご進講をひたすら集中して聴くという講書始の儀の形式でした．ご進講後のその場での質疑はありません．また，宮内庁ホームページで近年の講書始の儀の梗概をいくつかよく読むと，どの進講も学ぶことの多い内容であることがわかりました．しかし，資料配布も映像もない状況で，専門用語も出てくるご進講内容を聴くだけでフォローするのは困難と思える例もあると感じました*4.

進講者控として陪席した昨年の講書始の儀で最も感銘したのは，天皇皇后両陛下始め皇族の方々が居住まいを正し，ご進講者をじっと見据えてご進講をお聴きになっている姿でした．国民の注目を集める儀式ですので，参加される皇族方にとって心理的なご負担も小さくないのではと拝察致しました．

さて1年経ち，当日は宮内庁官用車のセンチュリーが8時過ぎに拙宅に迎えに来て，モーニングを着用したまま皇居に向かいました．車は北側の乾門から入門し，宮殿南車寄で下車，回廊を通って千鳥の間にまずは案内されます．ここで宮内庁長官ほかの挨拶を受け，式部官から式次第の説明の後，会場となる正殿松の間まで移動して所作のリハーサルを行います．その後一旦千鳥の間に戻

写真1　講書始の儀でのご進講（宮内庁報道室提供）

*3 昨今の戦争を主導する暴君の脅威を大変憂慮しますが，新春の寿ぎの場での述懐は控えることにしました．

*4 過去には陪聴者がつい居眠りする映像がSNSで拡散したりして，ご進講内容をフォローすることの難しさを物語っています．

写真2　1971年岡山天体物理観測所ご視察の浩宮様．背後左から東京天文台の末元善三郎，石田五郎，1人おいて大沢清輝の各氏（岡山天体物理観測所40周年記念誌より）．

り，定刻になると陪聴者，進講者控，進講者の順で正殿松の間に入場着席して天皇皇后両陛下の入場を待ちます．やがて，北側の扉がノックされ両陛下に続き皇族方が入場され，講書始の儀が始まりました．皇居内の各広間には掛け時計など一つもありませんが，分単位でスケジュールされた儀式は段取り通りに進行しました．今年の進講者と題目は（1）佐々木正子嵯峨美術大学名誉教授「江戸時代の日本絵画」，（2）御厨貴東京大学名誉教授「オーラル・ヒストリーとは何か」，（3）私「観測天文学最前線と日本の活躍」でした．なるべく顔を上げてお話しするように心がけました．天皇皇后両陛下はじめ皇族の方々も，時々頷きながら聴いて下さっている様子がよくわかりました．不思議と緊張はありませんでした．ご進講梗概は宮内庁ホームページ（https://www.kunaicho.go.jp/learn/culture/kosyo/kosho-r08.html）に掲載され，また講書始の儀の様子はテレビ東京のYouTube（https://www.youtube.com/watch?v=uRc7CF42PAs）などで公開されたので，ご進講後，わかりやすく面白かったとの感想を数多く頂きました．

ご進講終了後，別の間で両陛下とお話しする機会がありました．ここではご進講内容に関する質疑・会話に加えて，天皇陛下が岡山天体物理観測所をご視察された想い出やご自身の反射望遠鏡で天体撮影をされておられることもお話し戴き，天文談義でも会話が盛り上がりました．

今回のご進講が，天文学の意義と魅力を一般の方にも知って頂く契機となればと願っております．